

## 島原大変(1792)を描いた絵図と文書(真田宝物館と佐久市五郎兵衛記念館)の詳細検討

一般財団法人 砂防フロンティア整備推進機構 井上 公夫  
土木・環境しなの技術センター 山浦 直人

### 1. 長野市立真田宝物館と佐久市五郎兵衛記念館の「島原大変」関連の絵図と文書

雲仙普賢岳は寛政噴火(1791-92)を起こしたが、最末期の寛政四年(1792)四月一日の四月朔地震で眉山が大崩壊を起こし、島原大変肥後迷惑と呼ばれている。井上(1999)は、砂防学会誌、52巻4号で論述するとともに、いさぼうネット「歴史的な大規模土砂災害地点を歩く」のコラム7で説明した。

コラム7 1792年の島原大変肥後迷惑(公開日:2015年7月30日)。

<https://isabou.net/knowhow/colum-rekishi/colum07.asp>

長野市立真田宝物館は、「島原大変」に関する4枚の絵図を所蔵している。2025年5月の砂防学会(長野大会)終了後、山浦と一緒に真田宝物館に行き、島原大変を描いた4枚の実物絵図を見せて頂いた。これらの絵図は寛政噴火の状況を鮮明に描写しているが、絵図内に記載されているくずし字が読めなかったため、TOPPANにくずし字の解読を依頼した。この結果についてはコラム102で説明した。

コラム102 長野市真田宝物館にあった『島原大変絵図』のくずし字解読をもとにした島原大変肥後迷惑の再検討(公開日:2025年9月11日)

<https://isabou.net/knowhow/colum-rekishi/colum102.asp>

その後、佐久市五郎兵衛記念館に今までほとんど知られていなかった島原大変に関する絵図と一冊の古文書があり、土屋雅憲(1992)により翻刻されていることが判明したので、コラム104で説明した。

コラム104の修正追記と五郎兵衛記念館の絵図・文書(公開日:2025年11月27日)

<https://isabou.net/knowhow/colum-rekishi/colum104.asp>

ここでは、五郎兵衛記念館にあった絵図と古文書の解読結果を中心について説明する。

### 2. 佐久市五郎兵衛記念館の絵図の内容

五郎兵衛記念館には寛政四年の普賢岳に関する1枚の絵図と1冊(五通)の古文書があることが、土屋雅憲(1992)によって発見された(図1)。島原大変関連の文書は、島原藩主・松平主殿頭忠恕が島原噴火の様子をその時々<sup>とのものかみただひる</sup>に老中(御用番)に報告したものの写しと思われるので、土屋の翻刻結果を紹介する。

絵図は普賢岳の噴火の様子を描いたもので、閏二月二十一日(3月13日)に島原におもむいた合羽屋五郎兵衛からきいた話と、肥後熊本藩の飛脚である松川庄助が三月四日(4月24日)に「高瀬脇の石貫」という場所から「見渡シ」て描いたものを合わせた絵図である。噴火の様子が朱で示されており、噴火の激しさがわかる。



図2 寛政四年肥前国嶋原焼山御届書写

図1 寛政四年肥前国嶋原焼山御届書写(佐久市五郎兵衛記念館蔵)  
(五郎兵衛新田古文書目録 第二集 D1357)

は土屋雅憲様が絵図の中の文字を翻刻し、

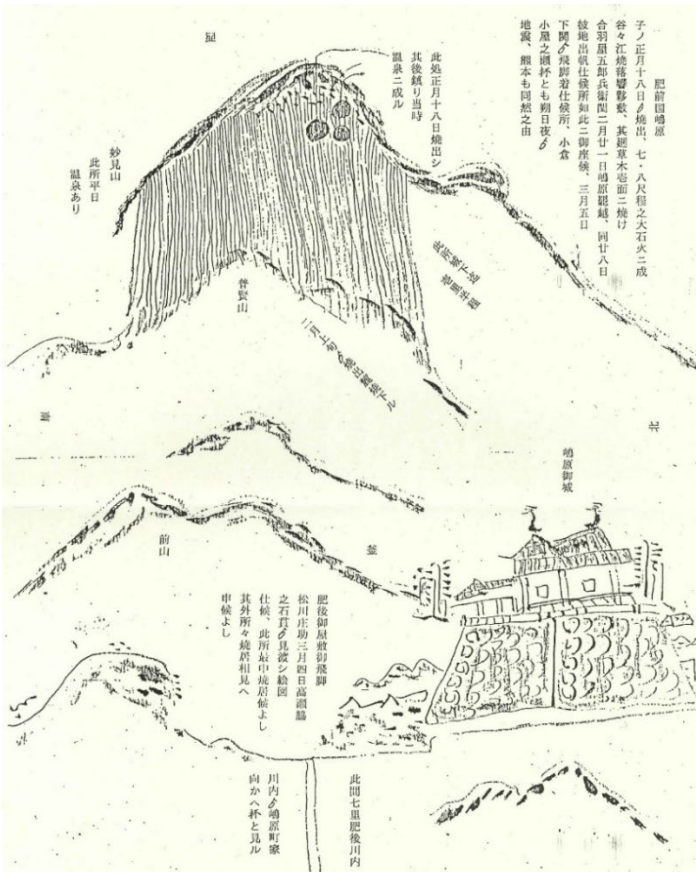


図2 寛政四年肥前国嶋原焼山御届出書写絵図の翻刻図  
(土屋雅憲作成)

絵図の同じ位置に示してある。噴火の状況がかなり詳しく説明されている。普賢山(奥山)と眉山(前山)・城下町を同一の絵として入れてある。上図は三月五日(4月25日)、下図は三月四日(4月24日)の日付が書かれており、右下に「島原御城」が描かれている。

### 3. 幕府に報告した五通の古文書

古文書は、時の島原藩主松平 忠恕<sup>ただひろ</sup>が島原の噴火の様子を、その時々幕府老中(御用番)に報告したものの写しで、二月九日(3月2日)・閏二月六日(3月28日)・三月三日(4月23日)・四月二日(5月22日)・四月付の五通からなっている。このような報告を五郎兵衛新田村の農民(筆跡からみておそらく名主の所左衛門)がどうして写すことができたのかはわからない。

表紙には、次のように記されている。

寛政四年

肥前国嶋原焼山御届書写

六月廿四日

これによると、写したのは寛政四年六月二十四日(1792年8月11日)だったと思われる。

一通目の二月九日付けの報告では、正月十八日夜に普賢山が噴火し島原城下まで響いたこと、差し渡し三〜四間ほどの噴火口が二つ開いて、そこからおびただしい泥土が吹き出したこと、普賢山続きの穴迫と言う場所でも二月六日に噴火があった(田畑や民家には被害無し)ことなどが報告されている。

二通目の閏二月六日付けの報告では、二月九日頃から穴迫に夜分火気が見えるようになったこと、今いう溶岩ドームが出現、すなわち「谷の中、焦げ石など段々に崩れ落ち、下より焼け岩頭われ出、堅百間余り、幅は八十間ほども相見え、右岩少々ずつ崩れ、谷そこへ転げ落ち候」と記されている。

さらに、最初に噴火した普賢山は次第に鎮まったが、そこから十町ほど隔たった蜂窪から二月二十九日に噴火し、閏二月三日には二町ほど隔たった西方からも噴火したことが報告されている。

四通目の四月二日付けの報告では、四月一日午後6時過ぎにこれまで以上に強い地震があって、眉山が頂上より根方まで一時に割れ崩れ、山水を押出し、また海からは高水(津波)が打ち上げて、島原城下を暫時に押し流し、城下居住の者は過半即死したが城内は別条ないと報告されている。

### 4. むすび

五通の古文書は、島原藩主・松平 忠恕<sup>ただひろ</sup>が島原の噴火の様子を、その時々幕府老中(御用番)に報告した文書の写しとみられる。このような報告を五郎兵衛新田村の農民がどうして写すことが出来たのかはわからない。寛政四年(1792)の島原大變が天明三年(1783)の浅間山噴火から9年後で、浅間山南麓の住民は、大災害に関心が高かったと推測される。江戸時代も後半の時期であり、このような絵図・古文書を収集できるほど、背景となる社会が充実してきたためであろうか。